

## アリストテレスにおける命題の対立関係と問答法

高橋 祥吾

### 1. 目的

本稿の目的は、命題の対立関係がアリストテレスの考える問答法的推論と、どのような関わりを持つのか、その一端を明らかにすることである。具体的には、命題の要素について、命題の対立関係とその対立関係を支える原則について、この二つをできる限り明確にすることを目指す。その結果として、命題の対立関係と問答法的推論との関係を論じることができるであろうと思われる。それゆえ、まずはじめに、命題の要素について、そして命題の構造について考察する。伝統的論理学<sup>1</sup>においては、命題は二つの項とそれらを繋ぐCopulaによって構成されていると考えられている。二つの項の一つは主語であり、もう一つは述語である。その一方で、『命題論』では名と述べ言葉という要素に分解される。しかし、述べ言葉という概念は非常に曖昧である。なぜなら、述べ言葉の定義にそぐわないように思われる要素、つまり“is”が存在するからである。それゆえ最初の考察の目標は、これらの命題の要素がどのような機能を持っているかを明らかにすることである。第2の考察は命題と問答法との関係であり、この考察によって問答法の問いには、命題の対立関係が必要であることを明らかにする。それによって、『命題論』という著作が、『分析論』だけでなく、『トピカ』とも関係することが理解されるだろう<sup>2</sup>。

<sup>1</sup>ここで「伝統的」と言っているのは、アリストテレスに端を発する論理学のことであるが、本論で述べるように、アリストテレス自身の論理学とは命題に対する考え方が異なると考えられる。

<sup>2</sup>伝統的には、『命題論』は『カテゴリーイ』と『分析論』の間に位置付けられ、これらの著作との関係で考察されてきた。(E. g. Thomas 1964: p. 7 no. 5)

### 2. 命題の構造

『命題論』の主題は、Whitakerの主張するように(Whitaker, 1996: p. 3), 矛盾対立する命題の組を考察することにあると考えられる。アリストテレスは、命題を名と述べ言葉から構成されていると分析し、述べ言葉を否定することで否定の命題を得ることができると考えているように見える。しかしながら実際の所、述べ言葉の定義通りに肯定や否定は形成されない。実際は、命題の対立関係の特徴を示す、別の原則に基づいているようである。まず、『命題論』で示されている命題の諸要素について見ていることにする。

『命題論』の中でアリストテレスは、命題を大きく二つの要素からなるものであると分析する。その二つの要素とはすなわち、名と述べ言葉である。『命題論』の中では基本的に、名と述べ言葉から構成されたものを命題と呼ぶ。アリストテレスは、名と述べ言葉を簡潔に次のように定義している。

名は、時間の概念を持たない慣例に従った有意義な音声である。そして名のどの部分も分離されては有意義であることはない。(De int. 16a19-21)

述べ言葉は、時間を付加的に意味しているものである。そして述べ言葉の部分は分離しては何も意味しない。そして述べ言葉は、他のものについて語られることのしるしである。

(De int. 16b6-7)

近年、Whitakerによって、『命題論』と『トピカ』や『ソフィスト的論駁』との関連が主張されている。(Whitaker 1996: p. 2; p. 182) 本論は、この立場を擁護する見解をとる。

このように、名と述べ言葉は、音声であり、習慣によって意味付けがなされているものである。また、名や述べ言葉の部分だけを切り離して考えても、意味を成さないため、名と述べ言葉が有意味な音声としては最小の単位とも言える。上記の定義から、名と述べ言葉が区別されるのは、時間を付加的に意味するかどうか、他のもののしるしとなるものかどうか、という点にある。しかし実際のところ、名と述べ言葉の区別は相対的なものであり、発話の文脈に左右される。実際アリストテレスは、述べ言葉がそれ自体単独で語られた場合は、名であると言っている。(De int. 16b19) 文脈から切り離された場合、述べ言葉は名と見なされるのである。それゆえ、命題の要素は究極的にはすべて名に還元されることができると考えることができる。とはいえ、一つの命題の中に名と述べ言葉は見い出されなければならず、名は命題の主語として、述べ言葉は述語としての役割をもつと言えるだろう<sup>3</sup>。

さて、このような名と述べ言葉からなる命題は、一つの事柄について他の一つの事柄が属しているか、あるいは属していないかを意味表示する音声であると説明されている。この時、何かが属していることを表現するのは、述べ言葉の役割である。述べ言葉は、「他のものについて語られることのしるし」であると定義されていたが、アリストテレスは、「常に属しているもののしるし」であるとも言っているのである。(De int. 9-10) そして、何かが属していないことを表すためには、つまり否定の命題を作るためには、述べ言葉を否定しなければならないと考えられる。それゆえさらに、あらゆる命題は述べ言葉か、述べ言葉の変化したものからできていなければならないと言う。なぜなら、述べ言葉がなくては肯定の命題も、否定の命題も作ることができないからである。(De int. 17a9-10; 19b12)

しかし、以上のような説明だけでは、アリストテレスの用いる命題が完全に説明されたとは言えない。それは、定義にそぐわない言葉が存在するからである。それは、「ある」という言葉である。この「ある」は、存在を表す「ある」として用いられる場合、例えば「ソクラテスが

在る」のような場合、述べ言葉であると言われている。(De int. 19b13-14) その一方で、「雪は白いものである」と言われる時の、「である」としての「ある」は、述べ言葉として位置付けられていないのである。彼は次のように言う。

そして、「ある」が第三のものとして付加的に述語付けられているとき、対立は二通りに語られる。例えば「人間は正しい」と言うような場合に、「ある」は、それは名か述べ言葉かであるかはともかく、肯定の命題の中に第3のものとして共に措かれていると私は言っているのである。(De int. 19b19-22)

このようにアリストテレスは、「である」を表す「ある」を、名でも述べ言葉でもない、第3番目の要素と見なしている<sup>4</sup>。

アリストテレスが、「である」としての「ある」を述べ言葉として見なしていないならば、例えば「ソクラテスは正しいものである(Socrates is just)」の否定は「ソクラテスは正しいのではない(Socrates is not just)」ではなく、「ソクラテスは正しくないものである(Socrates is non-just)」であると考えることができるのではなからうか。もしくは、「ソクラテスは正しいのではない」と「ソクラテスは正しくないものである」は同じことを意味していると考えて、区別しないということも考えられるかもしれない。しかしながら、「ソクラテスは正しいものである」の否定は「ソクラテスは正しいのではない」と見なすべきである。実際、アリストテレス自身もそのような考えているし、「ソクラテスは正しいのではない」と「ソクラテスは正しくないものである」を明確に区別している。「ソクラテスは正しくないものである」はあくまで肯定の命題なのである。では、アリストテレスはどのように考えているのだろうか。

Ackrillは、この問題について次のように考えている。まず、アリストテレスは動詞(述べ言葉)を、「である」と分詞の組み合わせで表現

<sup>4</sup> この「ある」は伝統的にCopulaと見なされているが(E. g. Ross 1996: p. 28 Ackrill 1963: p. 142), Barnesと同じく、私はCopulaと呼ぶべきでないと思う。(Barnes 1996: p. 192, n. 60)

<sup>3</sup> Cf. Ackrill, 1963: p. 118.

できると考えていたと推測される。なぜなら、彼は次のように言っているからである

「人間が歩く(a man walks)」と言うことと、  
「人間は歩くものである(a man is walking)」  
と言うことは何も違いがない。(De int. 21b9-10)

それゆえ、彼は“Socrates is white”という命題の述ベ言葉は、“is white”であると見なしていたと考えられる。そのため、“is”は述ベ言葉の断片と考えられる。(Ackrill 1963: pp. 119-120) また Barnesは、「である」という言葉についての次のようなアリストテレスの見解を持ち出す。

私は、「ある」が「正しい」や「正しくない」  
に付け加えて置かれていると言っているの  
である。(De int. 19b24-25)

Barnesは、この箇所「である」としての「ある」が命題の中でどのように位置付けられているかを見いだす。(Barnes, 1996: pp. 179-180; pp. 190-194) つまり、「である」は述語となる言葉と強い結びつきを持っているということである。それゆえ、19b19で「ある」が「付加的に述語付けられている」と言われるとき、何に対して付加されているかと言えば、それは述語となるべき言葉なのである。「付加的に述語付けられている」という表現は、述語となるべき名に付加されて、その語と共に主語となる名に述語付けられるということを意味していると思われる。

### 3. 命題の対立関係

以上のことから、「である」は述語となる言葉と結びつき、全体として述ベ言葉の機能を有していると考えられる。しかしながら、「である」と述語の組み合わせ、例えば“is white”のうち、“white”ではなく“is”を否定しなければ、否定の命題を作ることが出来ないことについてアリストテレスはどのように考えているのだろうか。この点について、彼は次のように言っている。

例えば、「人間である」の否定の表現は「人間でない」であり、「人間でないものである」

ではない。また、「白い人間である」の否定の表現は、「白い人間でない」であり、「白くない人間である」ではないのである。なぜなら、もしあらゆる事柄について肯定と否定の命題が成り立つならば、「木材」について「白くない人間」と言うことは真であることになるだろうからである。(De int. 21b1-5)

このように、アリストテレスは否定命題をつくるためには、「である」を否定しなければならないと考えている。なぜそうしなければならないかと言うと、もし「である」ではなく述語となる語の方を否定した場合、上記の引用のように、「木材は白くない人間である」という命題が正しい命題になってしまうからである。

一つの肯定の命題には、否定の命題が一つだけ対立しており、その命題の組のうちの一方は真であり、もう一方は偽でなければならない。さて、「木材は白い人間である」という命題は明らかに偽である。なぜなら木材が人間であるはずがないからである。「木材は白い人間である」には対立する否定の命題が存在する。もしその否定の命題が、「である」を否定して得られたものでなく、述語を否定した「木材は白くない人間である」とするならば、この命題が真であることになってしまう。しかし、それは不合理である。それゆえ、「である」を否定した「木材は白い人間ではない」が対立する命題とされなければならないのである。

アリストテレスが以上のように考えるとき、「対立する命題うちの一方は真であり、もう一方は偽でなければならない(Cat. 13b2-3)<sup>5</sup>」という考えが原則として前提されている。アリストテレスにとって、二つの命題が矛盾対立しているか否かは、この原則に照らし合わされて判断されるのである。この原則が守られるように、否定の命題が作られなければならない。それゆえ、述ベ言葉の定義も、「である」という言葉も、この原則を守るように位置付けられていると思われる。

さて、この原則は命題の対立関係に固有なこ

<sup>5</sup> Whitakerはこの法則を“Rule of Contradictory Pairs [RCP]”と名付けている。(Whitaker 1996: p. 79)

となのである。このことは、命題の対立関係が『カテゴリーアイ』の中で、その他の対立関係と並べて説明されるときに、はっきりと示されている。『カテゴリーアイ』の第10章では、対立関係が4種類挙げられている。その4種類とは、1) 関係として対立しているもの、2) 反対のものとして対立しているもの、3) 欠如と所有として対立しているもの、そして4) 肯定と否定として対立しているものの4種である。そして肯定と否定の対立関係は、他の3種の対立と区別されている。アリストテレスは次のように言う。

そして、肯定と否定として対立している限りのものが、先に述べた（3種の対立の）仕方のいずれにも基づいていないことは明らかである。というのは、この肯定と否定の対立のみ、常に対立しているものの一方が真で、もう一方が偽であるということが決まっているからである。実際、反対のものどもについて、常にそのうちの一方が真で、他方が偽であることは必然ではないし、関係的なものどもについても、所有と欠如についても必然ではないのである。例えば、健康と病気は反対であるが、しかしどちらも真でも偽でもない。そして同様に2倍と半分も関係として対立しているが、しかしどちらも真でも偽でもない。そして欠如と所有に基づいたものもまた、例えば視力と盲目性のように、真でも偽でもないのである。一般に、いかなる結合にも基づかず語られるもののうち、いかなるものも真でも偽でもない。そして、上述の（3種の）ものは結合なしに語られるのである。（*Cat.* 13a37-13b12）

このように、肯定や否定は、命題であり、命題は「結合に基づいて」語られるものである。それに対して、関係や反対、欠如と所有は、「結合なしに」語られるものなのである。ここで、肯定と否定は対立関係のなかでも特別な位置付けを与えられている。また、「結合なしに」語られた対立関係に基づいて作られた命題も、矛盾対立することが必然ではない。例えば「病気」と「健康」は、反対のものとして対立している。

これらから、「ソクラテスは健康である」と「ソクラテスは病気である」という対立している命題を作ることとする。通常、ソクラテスという人物が健康な状態なら、「ソクラテスは健康である」という命題は真であり、「ソクラテスは病気である」という命題は偽である。このとき、「対立する命題の一方が真で、他方が偽である」と言えるので、原則を満たしているように思われる。しかし、アリストテレスはここで、ソクラテスなる人物が存在しないとき、二つの命題はどちらも偽であると言う（*Cat.* 13b12-19）。それゆえ、「結合なしに」語られる時に対立するものから命題を作ったとしても、それらの命題は矛盾対立するものではないのである。それに対し、「ソクラテスは病気である」と「ソクラテスは病気ではない」という対立関係は、ソクラテスの実在に関係なく、どちらか一方が真で、他方が偽となるのである（*Cat.* 13b27-35）。このように、命題の対立関係は、「結合なしに」語られるものの対立関係と明確に区別されねばならない。命題の矛盾対立関係が他の対立関係と区別されるのは、命題の対立関係だけが概念的な対立関係ではないからである。概念的に対立しているものだけが「結合なしに」語られるのである。

以上のように、命題の矛盾対立関係は、命題の要素の概念レベルでの対立とは関係がない。それゆえに、命題の構造を表すために名と述ベ言葉という説明方式は用いられたのだと考えられる。しかし、述ベ言葉の定義だけでは、あらゆる命題の矛盾対立関係を説明できていないと思われるため、はじめに行われる述ベ言葉の定義付けが不完全であるとも思われる。ただし、「である」という言葉の特殊性によって、その不完全さを補完していると考えられるのである。

#### 4. 問答法との関係

さて、最後に以上のような命題に対する考察と、問答法との関連を考える。すでに見てきた四つの対立関係は問答法とどのように関係するのか。アリストテレスは、肯定と否定による対立関係と問答法との関係を『命題論』の中で、次のように言っている。

だから、もし問答法で使われる問いが、提言への返答であれ、対立関係にある命題の片方の部分への返答であれ、返答の要求であるなら、とはいえ提言は対立している命題の一つの部分なのであるが、それ（「ソクラテスは白い歩く人」のような種類の命題<sup>6</sup>を用いた問答法での問い）に対する返答は一つではないだろう。というのは、質問も一つではなく、答えも、仮に真であるとしても、一つではないからである。しかし、これらについては『トピカ』の中で語られた。そして同時に明らかなのは、「何であるか」も問答法で用いられる問いではないということである。というのも、対立関係にある命題の部分のいずれかを表明しようと選択することが、問いから与えられなければならないからである。そこで、問う人は「人間はこれこれであるか、あるいはそうでないか」と問いを定めなければならないのである。（*De int.* 20b22-30. 括弧内は筆者による挿入）

問答法で用いられる問いの形は、問題（*πρόβλημα*）、あるいは提言（*πρότασις*）の形で表れる。これら二つは、『トピカ』では、言語表現の違いとして区別されている。問題は、「二足歩行の動物は、人間の定義であるか、そうでないか」という形をとる。他方で提言は、「二足歩行の動物は人間の定義ではないか」という形をとる（*Top.* 101b28-33）。しかし、引用した『命題論』20b22-30では、『トピカ』のように厳密には区別されていないようである。『トピカ』でも「実際、あなたはすべての提言から問題を、それが語られている方法を変えることで、作ることができるだろう（*Top.* 101b35-36）」とされていることから、20b22-30では、問答法で用いられる問いとして、両者は区別なく語られていると考えられる。そして、『トピカ』でも、問答法的な問いは、イエスカノーで答えられるものでなければならないと言われているのである。（*Top.* 158a16-17）

従って、問答法との関係においても、命題の

<sup>6</sup> この例はTricotの例を参考して用いた。（Tricot 1997: p. 115, n.5）

肯定と否定の対立関係は、他の三つの対立関係と区別されていると言ってよいだろう。他の対立関係は、問答法の問いを立てるために有用なのではなく、種々のトポスの一つとして問答法と関係している。逆に、肯定と否定の対立関係は、それ自体はトポスとなることはない<sup>7</sup>。

以上から、我々は命題の肯定と否定の対立関係が、問答法の問いを作るために必要なものであるとすることができる。そして、『命題論』の主題である命題の対立関係の発見は、そのために必要な考察であると言える。では、そもそも問答法的な問いは、なぜイエスカノーで答えられるものでなければならないのであろうか。それは、問答法は、真であることが確かめられていない思惑、すなわち‘*ἐνδοξα*’に基づいて推論するからである。‘*ἐνδοξα*’とは「あらゆる人、あるいは最も多くの人々、あるいは賢人に受け入れられている」ものである。（*Cf. Top.* 104a8-9）この‘*ἐνδοξα*’の確実性は問答法によって確かめられてゆくものなのである<sup>8</sup>。問答は、「対立する命題うちの一方は真であり、もう一方は偽でなければならない」という原則に基づいて行われる。問答法的問いを『トピカ』で言うところの問題の形、つまり「二足歩行の動物は、人間

<sup>7</sup> この肯定と否定の対立関係がトポスとして利用されているように見える箇所が『トピカ』にある。『トピカ』136a5でアリストテレスは、「次に、肯定と否定に基づいて考察しなければならない」と言って、トポスを説明する。しかしこの箇所は、Smithが言うように、肯定や否定の文のことでなく、肯定的表現や言葉、否定辞のついた言葉や否定的表現のことをトポスとして挙げていて、『命題論』で述べられている肯定や否定とは意味内容が異なる。（Smith 1997: introduction, xxxi）

<sup>8</sup> しかし、‘*ἐνδοξα*’の確実性が確かめられると言っても、それは‘*ἐνδοξα*’がより高いレベルで確実なものであることが導かれるだけであり、問答法的推論によっては‘*ἐνδοξα*’が真であるかどうか、その真理は確認することができないように思われる。このように考えると、問答法は、『分析論』で展開される「論証」と比べて、哲学的認識にとっては低い位置付けになってしまうだろうが、アリストテレス自身がそのように考えた結論付けるには、本論の考察の範囲を超える考察が必要である。問答法が哲学的認識にとって、どのように積極的役割を果たしうるかという点については、赤井清晃「ペイラ（吟味）とエレンコス（論駁）—アリストテレスにおけるディアレクティケーの問題—」（『ヘーゲル學報』第四號、京都ヘーゲル読書会 1999 pp. 751-776）を参照。

の定義であるか、そうでないか」のような形で作るとする。この時、もし答え手が問い手の提示する問題を偽として退ける場合、問題に使われている命題の矛盾対立する命題が必然的に真として受け入れられることになる。問答法において、問題を退けることは、偽として退けることであり、且つその矛盾対立する命題を真として受け入れることなのである。しかし、それは正しく問答法ための問いが作られている場合に限るのである。もし、いかなる矛盾対立する命題も存在しないような命題を用いて問いを作ったならば、その問いに対して答えることはできなくなるであろう。また、対立する命題が複数想定される場合も同様である。

結果として、問答法的推論を行うためには、命題の矛盾対立関係を考察することが不可欠であることは明らかであろう。そして、『命題論』の目的が命題の矛盾対立関係にあるならば、この著作の前半で行われている名と述ベ言葉の定義付けと、その命題構造は、矛盾対立関係を見出すために、理解するために有用なものであるとアリストテレスは考えたのである。

#### 参考文献

- Ackrill, J. L., 1963: *Aristotle's Categories and De Interpretatione*, Oxford: Clarendon Press.
- Barnes, J., 1996: "Grammar on Aristotle's Terms", in M. Frede and G. Striker(eds.), *Rationality in Greek Thought*, Oxford: Oxford Univ. Press, pp. 175-202.
- Ross, W. D., 1996: *Aristotle* (with a new introduction by John L. Ackrill), London and New York: Routledge.
- Smith, R., 1997: *Aristotle's Topics Books I and VIII*, Oxford: Clarendon Press.
- Thomas Aquinas, 1964: *In Aristotelis Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio*, Torino: Marietti.
- Tricot, J. 1997: *Aristote; Organon, 2, De l'interprétaion*, Paris: Vrin.
- Whitaker, C W. A., 1996: *Aristotle's De inter-pretatione*, Oxford: Clarendon Press.

(たかはし しょうご, 広島大学大学院 [哲学])